

SON-2139
(80001-2139)



09/875,021

IN THE UNITED STATES PATENT AND TRADEMARK OFFICE

In the Patent Application of

NOBUHIRO KIHARA

Art Unit: 2872

Serial No. 09/875,021

Examiner: Arnel C. Lavarias

Filed: June 7, 2001

For: HOLOGRAPHIC STEREOGRAM EXPOSURE APPARATUS,
METHOD THEREOF, AND HOLOGRAPHIC STEREOGRAM
GENERATION SYSTEM

CLAIM TO PRIORITY UNDER 35 U.S.C. 119

Commissioner for Patents
Washington, D.C. 20231

Sir:

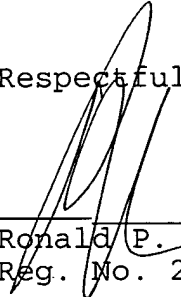
The benefit of the filing date of the following prior
applications filed in the following foreign country is hereby
requested and the right of priority provided under 35 U.S.C. 119
is hereby claimed:

Japanese Patent Appl. No. P2000-172616, filed June 8,
2002

In support of this claim, filed herewith is a certified
translation of said original foreign applications.

Respectfully submitted,

Dated: November 21, 2002



Ronald P. Kananen
Reg. No. 24,104

RADER, FISHMAN & GRAUER P.L.L.C.
1233 20TH Street, NW
Suite 501
Washington, DC 20036
202-955-3750-Phone
202-955-3751 - Fax
Customer No. 23353

RECEIVED
NOV 22 2002
TC 2800 MAIL ROOM



日 本 国 特 許 庁
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office

出 願 年 月 日
Date of Application:

2000年 6月 8日

出 願 番 号
Application Number:

特願2000-172616

[ST.10/C]:

[JP2000-172616]

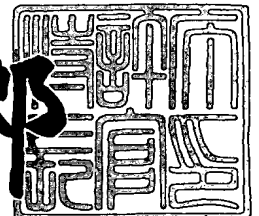
出 願 人
Applicant(s):

ソニー株式会社

2002年10月18日

特 許 庁 長 官
Commissioner,
Japan Patent Office

太田 信一郎



出証番号 出証特2002-3082238

【書類名】 特許願

【整理番号】 9900986003

【提出日】 平成12年 6月 8日

【あて先】 特許庁長官 近藤 隆彦 殿

【国際特許分類】 H04M 7/34

【発明者】

【住所又は居所】 東京都品川区北品川 6 丁目 7 番 3 5 号 ソニー株式会社
内

【氏名】 木原 信宏

【特許出願人】

【識別番号】 000002185

【氏名又は名称】 ソニー株式会社

【代表者】 出井 伸之

【代理人】

【識別番号】 100067736

【弁理士】

【氏名又は名称】 小池 晃

【選任した代理人】

【識別番号】 100086335

【弁理士】

【氏名又は名称】 田村 榮一

【選任した代理人】

【識別番号】 100096677

【弁理士】

【氏名又は名称】 伊賀 誠司

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 019530

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 9707387

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 ホログラフィックステレオグラム露光装置及び方法、並びにホログラフィックステレオグラム作成システム

【特許請求の範囲】

【請求項 1】 ホログラム用記録媒体に三次元画像情報を露光するホログラフィックステレオグラム露光装置において、

視差方向に分割表示された複数の画像を透過した光を重ね合わせて投影してから集光して分割数に応じた画像を上記ホログラム用記録媒体上に投影する物体光光学系

を備えることを特徴とするホログラフィックステレオグラム露光装置。

【請求項 2】 上記ホログラム用記録媒体に投影された上記画像と干渉させるための参照光を上記ホログラム用記録媒体に投影する参照光光学系を備えることを特徴とする請求項 1 記載のホログラフィックステレオグラム露光装置。

【請求項 3】 上記物体光光学系は、上記視差方向に複数の画像を分割表示する空間光変調手段と、この空間光変調手段を透過した光を重ね合わせて投影する重ね合わせ投影光学系と、この重ね合わせ投影光学系からの投影画像を上記ホログラム用記録媒体面上に集光する集光投影光学系とを備えていることを特徴とする請求項 1 記載のホログラフィックステレオグラム露光装置。

【請求項 4】 上記物体光光学系は、上記ホログラフィックステレオグラムが横方向の視差のみ持つように、上記空間光変調手段を視差方向に分割することを特徴とする請求項 3 記載のホログラフィックステレオグラム露光装置。

【請求項 5】 上記物体光光学系は、上記ホログラフィックステレオグラムが縦横両方向の視差を持つように、上記空間光変調手段を縦横両方向に分割することを特徴とする請求項 3 記載のホログラフィックステレオグラム露光装置。

【請求項 6】 上記物体光光学系の上記重ね合わせ投影光学系は、視差方向には上記空間光変調手段で分割表示された画像の各部分を重ねあわせで投影し、非視差方向にはそのまま投影して、上記空間光変調手段上に分割表示された像を空中像とすることを特徴とする請求項 3 記載のホログラフィックステレオグラム露光装置。

【請求項 7】 上記物体光光学系の上記集光投影光学系は、上記重ね合わせ投影光学系により投影された像を非視差方向には上記ホログラム用記録媒体上に投影し、視差方向には集光することを特徴とする請求項 6 記載のホログラフィックステレオグラム露光装置。

【請求項 8】 上記物体光光学系の上記集光投影光学系は、上記重ね合わせ投影光学系により投影された像を、第 1 群のレンズと第 2 群のレンズにより集光シリンドリカルレンズに入射させることを特徴とする請求項 7 記載のホログラフィックステレオグラム露光装置。

【請求項 9】 上記物体光光学系の上記集光投影光学系は、上記第 1 群のレンズと上記第 2 群のレンズの間に、上記ホログラム用記録媒体上の各要素ホログラムの視野角の不均一を補正する補正用レンズを備えることを特徴とする請求項 8 記載のホログラフィックステレオグラム露光装置。

【請求項 10】 ホログラム用記録媒体に三次元画像情報を露光するためのホログラフィックステレオグラム露光方法において、

視差方向に分割表示された複数の画像を透過した光を重ね合わせて投影してから集光して分割数に応じた画像を上記ホログラム用記録媒体上に物体光として投影する物体光投影工程と、

上記物体光投影工程により上記ホログラム用記録媒体に投影された上記物体光と干渉させるための参照光を上記ホログラム用記録媒体に投影する参照光投影工程と

を備えることを特徴とするホログラフィックステレオグラム露光方法。

【請求項 11】 上記物体光投影工程は、上記視差方向に複数の画像を分割表示し、この分割表示画像を透過した光を重ね合わせて投影してからその投影画像を上記ホログラム用記録媒体面上に視差方向に関しては集光し、非視差方向に関しては結像させることを特徴とする請求項 10 記載のホログラフィックステレオグラム露光方法。

【請求項 12】 ホログラム用記録媒体に三次元画像情報を記録してホログラフィックステレオグラムを作成するホログラフィックステレオグラム作成システムにおいて、

視差方向に複数の画像を生成する画像生成系と、

上記画像生成系により生成された複数の画像を視差方向に分割して表示し、この分割表示された複数の画像を透過した光を重ね合わせて投影してから集光して分割数に応じた画像を上記ホログラム用記録媒体上に投影する物体光光学系と、

上記物体光光学系により上記ホログラム用記録媒体に投影された上記画像と干渉させるための参照光を上記ホログラム用記録媒体に投影する参照光光学系とを備えることを特徴とするホログラフィックステレオグラム作成システム。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は、ホログラム用記録媒体に三次元画像情報を露光するホログラフィックステレオグラム露光装置および方法、並びにホログラフィックステレオグラム作成システムに関する。

【0002】

【従来の技術】

ホログラフィックステレオグラムは、例えば、被写体を異なる観察点から順次撮影することにより得られた多数の画像を原画として、これらを1枚のホログラム用記録媒体に短冊状又はドット状の要素ホログラムとして順次記録することにより作製される。

【0003】

例えば、横方向のみに視差情報を持つホログラフィックステレオグラムは、図12に示すように、被写体100を横方向の異なる観察点から順次撮影することにより得られた複数の原画101a～101eが、画像記録装置により、短冊状の要素ホログラムとしてホログラム用記録媒体102に順次記録されることにより作製される。

【0004】

このホログラフィックステレオグラムでは、横方向の異なる観察点から順次撮影することにより得られた画像情報が、短冊状の要素ホログラムとして横方向に順次記録されているので、このホログラフィックステレオグラムを観察者が両目

で見たとき、その左右の目にそれぞれ写る 2 次元画像は若干異なるものとなる。これにより、観察者は視差を感じることであり、3 次元画像が再生されることになる。

【 0 0 0 5 】

【発明が解決しようとする課題】

ところで、ホログラムの露光は非常に振動に対して敏感であり、露光時間中の光学系は記録波長のスケールで振動してはならない。しかし、上記のように、ホログラフィックステレオグラムを細いスリット状の要素ホログラムを一つずつ露光することで作成した場合、各露光間である程度振動が減衰するまで待つ必要があり、ホログラム作成時間を短縮する上での制約となっていた。また、要素ホログラム内のみを露光するためにそれ以外に行く光は不要光として捨てていたが、これはトータルとして露光時間の増加や高価なハイパワーレーザーの必要性につながり好ましくなかった。

【 0 0 0 6 】

本発明は、上記実情に鑑みてなされたものであり、ホログラム作成時間を短縮することのできるホログラフィックステレオグラム露光装置及び方法、並びにホログラフィックステレオグラム作成システムの提供を目的とする。

【 0 0 0 7 】

【課題を解決するための手段】

本発明に係るホログラフィックステレオグラム露光装置は、上記課題を解決するために、ホログラム用記録媒体に三次元画像情報を露光するホログラフィックステレオグラム露光装置において、視差方向に分割表示された複数の画像を透過した光を重ね合わせて投影してから集光して分割数に応じた画像を上記ホログラム用記録媒体上に投影する物体光光学系と、上記ホログラム用記録媒体に投影された上記画像と干渉させるための参照光を上記ホログラム用記録媒体に投影する参照光光学系とを備える。

【 0 0 0 8 】

上記物体光光学系としては、上記視差方向に複数の画像を分割表示する空間光変調手段と、この空間光変調手段を透過した光を重ね合わせて投影する重ね合わ

せ投影光学系と、この重ね合わせ投影光学系からの投影画像を上記ホログラム用記録媒体面上に集光する集光投影光学系とを備えている。

【 0 0 0 9 】

このため、空間光変調手段により視差方向に分割表示された複数の画像を透過した光を、重ね合わせ投影光学系で重ね合わせ、この重ね合わされた投影画像をホログラム用記録媒体面上に集光投影光学系にて集光することにより、一度に複数の要素ホログラムを露光できる。

【 0 0 1 0 】

本発明に係るホログラフィックステレオグラム露光方法は、上記課題を解決するために、ホログラム用記録媒体に三次元画像情報を露光するためのホログラフィックステレオグラム露光方法において、視差方向に分割表示された複数の画像を透過した光を重ね合わせて投影してから集光して分割数に応じた画像を上記ホログラム用記録媒体上に物体光として投影する物体光投影工程と、上記物体光投影工程により上記ホログラム用記録媒体に投影された上記物体光と干渉させるための参照光を上記ホログラム用記録媒体に投影する参照光投影工程とを備える。

【 0 0 1 1 】

上記物体光投影工程は、上記視差方向に複数の画像を分割表示し、この分割表示画像を透過した光を重ね合わせて投影してからその投影画像を上記ホログラム用記録媒体面上に視差方向に関しては集光し、非視差方向に関しては結像させる。

【 0 0 1 2 】

本発明に係るホログラフィックステレオグラム作成システムは、上記課題を解決するために、ホログラム用記録媒体に三次元画像情報を記録してホログラフィックステレオグラムを作成するホログラフィックステレオグラム作成システムにおいて、視差方向に複数の画像を生成する画像生成系と、上記画像生成系により生成された複数の画像を視差方向に分割して表示し、この分割表示された複数の画像を透過した光を重ね合わせて投影してから集光して分割数に応じた画像を上記ホログラム用記録媒体上に投影する物体光光学系と、上記物体光光学系により上記ホログラム用記録媒体に投影された上記画像と干渉させるための参照光を上

記ホログラム用記録媒体に投影する参照光光学系とを備える。

【 0 0 1 3 】

【発明の実施の形態】

以下、本発明を適用した具体的な実施の形態について、図面を参照しながら詳細に説明する。なお、本発明は以下の例に限定されるものではなく、本発明の要旨を逸脱しない範囲で任意に構成を変更することが可能である。

【 0 0 1 4 】

この実施の形態は、物体光と参照光との干渉縞が記録されたホログラム用記録媒体をそのままホログラフィックステレオグラムとする、いわゆるワンステップホログラフィックステレオグラムを作成するシステムであり、図 1 に示すように、記録対象の画像データの処理を行うデータ処理部 1 と、このシステム全体の制御を行う制御用コンピュータ 2 と、ホログラフィックステレオグラム露光用の光学系を有し、ホログラム用記録媒体に三次元画像情報を露光するホログラフィックステレオグラム露光装置 3 とから構成されている。

【 0 0 1 5 】

データ処理部 1 は、多眼式カメラや移動式カメラ等を備えた視差画像列撮影装置 1 3 から供給される視差情報を含む複数の画像データ D 1 や、画像データ生成用コンピュータ 1 4 によって生成された視差情報を含む複数の画像データ D 2 等に基づいて、視差画像列 D 3 を生成する。

【 0 0 1 6 】

ここで、視差画像列撮影装置 1 3 から供給される視差情報を含む複数の画像データ D 1 は、例えば、多眼式カメラによる同時撮影、又は移動式カメラによる連続撮影等によって、実物体を横方向の異なる複数の観察点から撮影することにより得られた複数画像分の画像データである。

【 0 0 1 7 】

また、画像データ生成用コンピュータ 1 4 によって生成された視差情報を含む複数の画像データ D 2 は、例えば、横方向に順次視差を与えて作成された複数の CAD (Computer Aided Design) 画像や CG (Computer Graphics) 画像等の画像データである。

【0018】

そして、データ処理部1は、視差画像列D3に対して画像処理用コンピュータ11によってホログラフィックステレオグラム用の所定の画像処理を施す。そして、所定の画像処理が施された画像データD4を、メモリ又はハードディスク等の記憶装置12に記録する。

【0019】

また、データ処理部1は、ホログラム用記録媒体に画像を記録する際に、記憶装置12に記録された画像データD4から、1画像分毎にデータを順番に読み出し、この画像データD5を制御用コンピュータ2に送出する。

【0020】

一方、制御用コンピュータ2は、ホログラフィックステレオグラム露光装置3を駆動し、データ処理部1から供給された画像データD5に基づく画像を、ホログラフィックステレオグラム露光装置3内にセットされたホログラム用記録媒体に、例えば短冊状の要素ホログラムとして順次記録する。

【0021】

このとき、制御用コンピュータ2は、後述するように、ホログラフィックステレオグラム露光装置3内部の空間光変調部に視差方向に複数の画像、例えば5つの画像を送り、上記空間光変調部を制御して5枚の画像を分割表示させる。また、制御用コンピュータ2は、後述するように、ホログラフィックステレオグラム露光装置3に設けられたシャッタ、記録媒体送り機構等の制御を行う。

【0022】

上記ホログラフィックステレオグラム露光装置3について、図2を参照して説明する。このホログラフィックステレオグラム露光装置3は、図2に示すように、所定の波長のレーザ光を出射するレーザ光源31と、このレーザ光源31を出たレーザ光L1を要素ホログラム露光のために通したり或いは遮断するシャッタ32と、このシャッタ32を通過したレーザ光を垂直に折り曲げるミラー33と、このミラー33により垂直に折り曲げられたレーザ光L2を物体光L3と参照光L4に分岐するビームスプリッタ34とを備える。

【0023】

また、このホログラフィックステレオグラム露光装置 3 は、上記物体光 L 3 を用いてホログラム露光面となるホログラム用記録媒体 4 2 に画像を投影する物体光光学系 3 5 と、この物体光光学系 3 5 によりホログラム用記録媒体 4 2 に投影された上記画像と干渉させるための参照光 L 4 を投影する参照光光学系 4 4 とを備える。

【 0 0 2 4 】

参照光光学系 4 4 は、ホログラム露光面（ホログラム用記録媒体 4 2）上で物体光 L 3 と干渉させるために、ビームスプリッター 3 4 により分岐され、ミラー 4 3 で反射された参照光 L 4 を所望の要素ホログラムサイズに変形し、ホログラム用記録媒体 4 2 上に投影するための光学系である。図 3 にはこのような参照光光学系 4 4 の具体例を示す。図 3 の（A）が上面図であり、図 3 の（B）が側面図である。ここでは 1 つの要素ホログラムの幅 d が 0.2 mm で、長さ L が 30 mm のホログラフィックステレオグラムを作成するときの例を挙げる。円筒レンズ 5 1 に入射した参照光 L 4 は水平方向にのみ広げられ、その後コリメートシリンドリカルレンズ 5 2 により平行光になる。その後、平行光となった参照光 L 4 は後述するように $D \times L = 5d \times L = 5 \times 0.2 \text{ mm} \times 30 \text{ mm}$ のスリット 5 3 を透過するが、このスリット 5 3 は第 1 のシリンドリカルレンズ 5 4 と第 2 のシリンドリカルレンズ 5 5 により倍率 -1 でテレセントリックにホログラム用記録媒体 4 2 面上に投影され、所望の参照光としての役割を果たす。

【 0 0 2 5 】

次に、物体光光学系 3 5 について説明する。物体光光学系 3 5 は、後述する照明光学系 3 6 と、空間光変調部 3 8 と、この空間光変調部 3 8 を透過した光を重ね合わせて投影する重ね合わせ投影光学系 3 9 と、この重ね合わせ投影光学系 3 9 からの投影画像をホログラム用記録媒体 4 2 面上に、視差方向に関しては集光し、非視差方向に関しては結像させる集光投影光学系 4 1 とを備えている。

【 0 0 2 6 】

以下、物体光光学系 3 5 を構成している各構成部について説明する。先ず、照明光学系 3 6 について説明する。この照明光学系 3 6 は、ビームスプリッター 3 4 により分岐された物体光 L 3 を均一に広げる。この均一に広げられた物体光 L

3 は、ミラー 3 7 により垂直に折り曲げられ、空間光変調部 3 8 に照射される。図 4 には照明光学系 3 6 の具体例を示す。この具体例では、顕微鏡対物レンズ 6 1 で入射ビームを広げピンホール部材 6 2 に設けたピンホールでビームのノイズを取り去りガウス分布のレーザ光とした後にコリメートレンズ 6 3 で平行光を得ている。この例以外にもライトインテグレータを使うことなども考えられる。

【 0 0 2 7 】

空間光変調部 3 8 としては液晶を用いる。この空間光変調部 3 8 は、上記図 1 に示した制御用コンピュータ 2 から送られてきた、視差方向に複数の画像、例えば 5 枚の画像を、制御用コンピュータ 2 の制御に応じて 5 分割表示する。なお、以下では液晶 3 8 として説明する。

【 0 0 2 8 】

次に、重ね合わせ投影光学系 3 9 について説明する。ここで説明を行う重ね合わせ投影光学系 3 9 が、本発明でもっとも特徴的なものであり、この重ね合わせ投影光学系 3 9 と後で述べる集光投影光学系 4 1 の作用により一度に多くの要素ホログラムを露光することが可能になるものである。ここで示す実施の形態では、液晶（空間光変調部）3 8 を視差方向に 5 分割して使う例を示す。また、説明の煩雑化を防ぐために、視差方向と非視差方向に分けて説明を行い、最後に重ね合わせ投影光学系全体を示す。

【 0 0 2 9 】

まず、重ね合わせ投影光学系 3 9 の視差方向（側面図）について図 5 を用いて説明する。上述の照明光学系 3 6 を通過してきたレーザ光は、図 5 中に示した液晶 3 8 面を均一に照らす。この液晶 3 8 を透過した光は、図 5 中に示すような 5 分割されたレンチキュラーレンズ 6 5 にあたり、その後図に示すような光路を通る。この光路について図 6 を用いて説明を行う。この図 6 には、光路の全体図（A）と、5 分割したうちの中央の部分（B）と、最も下の部分（C）に相当する光路を取り出して示す。このように、5 分割された重ね合わせ投影光学系 3 9 のそれぞれの部分はレンズ 6 6 の右側の部分に像 4 0 を結ぶ。さらに、その位置は 5 分割された液晶 3 8 上の画像がすべて同じ位置に重なることがわかる。また、液晶 3 8 を 5 分割した場合、液晶 3 8 の像 4 0 と元の画像が同じサイズになる

ためにはこの光学系の投影倍率は5倍になる必要がある。

【0030】

次に、重ね合わせ投影光学系39の非視差方向（上面図）について図7を用いて説明する。非視差方向には液晶38は分割していないので、投影倍率1倍で液晶38をそのまま投影すればよい。

【0031】

重ね合わせ投影光学系39全体については、上記で説明したような視差方向と非視差方向を組み合わせればよく、その例としては視差方向、非視差方向ともに光学系をシリンドリカルレンズで構成して組み合わせれば良い。もちろん、実際にはシリンドリカルレンズでも、パワーを持たない方向に対しても収差を含めての寄与をするので単純に組み合わせるのではなく、全体の収差が少なくなるような設計を行う必要がある。さらに、上記ではレンズ系の焦点距離などのパラメータについては述べなかったが、これらの値は以下で述べる集光投影光学系のパラメータと関連して説明を行う。

【0032】

次に、図8を用いて集光投影光学系41について述べる。図8の（A）には側面図を示し、図8の（B）には上面図を示す。この光学系は液晶の像40をホログラム記録媒体42面上に、視差方向（図8の（A）の側面図）に関しては集光し、非視差方向（図8の（B）の上面図）に関しては結像させるような光学系であり、この作用によりホログラフィックステレオグラムが立体的に見えるものである。集光投影光学系41は、図8に示すように、液晶の像40を第1のレンズ71により投影してスリット72を通し、第2のレンズ73で集光シリンドリカルレンズ74に入射させる。集光シリンドリカルレンズ74は視差方向に上記画像を集光してホログラム用記録媒体42に入射させ、非視差方向には結像させる。この光学系の基本構成は従来の集光投影光学系と同一であるが、スリット72の幅が今回の発明は異なる値をとる。従来の例だと、要素ホログラムの幅を0.2mmとするとスリットの幅は図からわかるように $0.2 \times 80 / 8.4 = 1.905 \text{ mm}$ の幅となる。これは視差方向すなわち図8の（A）で示す側面図内のスリット幅であり、上面図内に示すスリット幅に関しては特に制約はない。

【 0 0 3 3 】

以下では上で示した集光投影光学系 4 1 と、先ほど示した重ね合わせ投影光学系 3 9 を組み合わせた場合の光路を用いて一度に複数の要素ホログラム 7 6 を露光できる原理を説明する。図 9 が集光投影光学系 4 1 と重ね合わせ投影光学系 3 9 を組み合わせた図である。但し、図 9 は視差方向に関する図（側面図）であり、非視差方向は図 1 0 に示した。

【 0 0 3 4 】

液晶 3 8 には上記図 1 に示した制御用コンピュータ 2 から送られてきた、視差方向に 5 つの画像が、制御用コンピュータ 2 の制御に応じて 5 分割表示される。液晶 3 8 には照明光学系 3 6 を通過してきたレーザ光が均一に照らされる。この液晶 3 8 を透過した光（5 つの画像）は、5 分割されたレンティキュラーレンズ 6 5 に入射する。レンティキュラーレンズ 6 5 は、5 つの画像のそれぞれを拡大してレンズ 6 6 に送る。レンズ 6 6 は、5 分割された液晶 3 8 上の画像のそれぞれの部分をレンズ 6 6 の右側の部分に像 4 0 として結ばせる。このとき、その位置では 5 分割された液晶 3 8 上の画像がすべて同じ位置に重なる。

【 0 0 3 5 】

次に、液晶の像 4 0 は、第 1 のレンズ 7 1 により投影されてスリット 7 2 を通り、第 2 のレンズ 7 3 により集光シリンドリカルレンズ 7 4 に入射される。集光シリンドリカルレンズ 7 4 は視差方向に上記画像を集光してホログラム用記録媒体 4 2 に入射させ、非視差方向には結像させる。これによれ、5 分割された液晶 3 8 の画像が重ね合わせ投影光学系 3 9 によって重ね合わされ、その重なった像はさらに集光投影光学系 4 1 によってホログラム記録媒体 4 2 面上に投影され、その際に 5 箇所の異なる要素ホログラム 7 6 を露光することがわかる。この場合、一度に露光されるのは 5 枚分の 5 つの要素ホログラム 7 6 であり、各要素ホログラムの幅 d が 0.2mm であれば、5 倍の 1.0mm が露光される。

【 0 0 3 6 】

なお、ホログラム用記録媒体 4 2 は、例えばホログラムフィルムであり、フィルムカートリッジ 7 5 に巻回しされている。ホログラム用記録媒体 4 2 は、図示しない記録媒体送り機構により、フィルムカートリッジ 7 5 から引き出されて送

られる。この記録媒体送り機構による送りの際の振動減衰待ち時間が上述したようにホログラフィックステレオグラムを作成する時間を長くしていたが、上記ホログラフィックステレオグラム作成システム内のホログラフィックステレオグラム露光装置によれば一度に5枚分の視差画像列の要素ホログラムを記録できるので、上記振動減衰待ちの回数を減らせる。このため、トータルとしてホログラフィックステレオグラムを作成する時間を短縮できる。

【 0 0 3 7 】

ここで、重ね合わせ投影光学系39の焦点距離の決め方について述べる。図9を見てわかるように、ホログラム記録媒体42の面とレンティキュラーレンズ65の焦点面は共役である。また、要素ホログラム76の間隔の0.2mmは、ホログラム42面とレンティキュラーレンズ65の焦点面が共役であることより、レンティキュラーレンズ65の焦点面上では

$$0.2 \times (80/8.4) \times (f_2/80) \text{ mm}$$

に対応する。この間隔が液晶38を5分割した $16.8 \text{ mm}/5 = 3.36 \text{ mm}$ に対応している。すなわち、

$$0.2 \times (80/8.4) \times (f_2/80) = 3.36$$

となり、 $f_2 = 141.12 \text{ mm}$ を得る。また液晶38は5分割され、5倍投影される必要があるので $f_1 = f_2/5 = 28.224 \text{ mm}$ となる。なお、図10で示した非視差方向における重ね合わせ光学系39の焦点距離 f は投影倍率が1倍なので

$$(28.224 \text{ mm} \times 2 + 141.12 \text{ mm} \times 2) \div 4 = 84.672 \text{ mm}$$

となる。

【 0 0 3 8 】

次に、図11を用いて集光投影光学系41の他の例（集光投影光学系41'）について説明する。上記図9に示した集光投影光学系41では、各要素ホログラム76の中心部分に入射する光線がそれぞれ異なった角度となっていてしまっている。このような角度の違いがあると、完成したホログラムを観察したときに要素ホログラム毎に異なる角度範囲を再生してしまうことになり、視野角の不均一が生じる。そこで、図11に示した集光投影光学系41'では、第1のレンズ71と第2のレンズの間に設けたスリット72の位置に、補正用レンズを備える。この

補正用レンズにより、各要素ホログラム 7 6 の中心部分に入射する光線の角度をそれぞれの方向で平行とする。具体的にはスリット 7 2 の位置に視差方向のみにパワーを持つような補正用シリンドリカルレンズ 8 0 を追加し、ホログラム近傍の拡大図に示すように、各要素ホログラムの中心部分に入射する物体光の角度を揃える。このため、ホログラム用記録媒体 4 2 上の各要素ホログラム 7 6 の視野角の不均一を補正できる。この補正用シリンドリカルレンズ 8 0 の焦点距離はこの図 1 1 の場合、約 3 8 1 mm である。この集光投影光学系 4 1' によれば、完成したホログラムを観察したときに要素ホログラムごとに異なる角度範囲を再生してしまうことがなく、視野角の不均一を生じさせず、不都合を防ぐことができる。

【 0 0 3 9 】

以上、本発明の特徴である、1 回の露光で数スリット分を同時に露光できるように工夫された光学系について、実施例をもとに説明を行った。但し、上記の説明は理想レンズを用いた説明であり、実際は収差の補正を考慮に入れる必要がある。また、上記の理想レンズでの説明では視差方向と非視差方向が完全に独立であるとの仮定で説明を行ったが、実際は独立ではなく、この点も考慮に入れた設計が必要である。

【 0 0 4 0 】

本発明の変形例として、例えばフルパララックスホログラムすなわち横方向のみならず縦方向も視差を持つようなホログラムへの応用が考えられる。これは上記の実施例の形態において 5 分割の液晶とシリンドリカルレンズを用いたところを、例えば 5 × 5 分割にして通常のレンズを用いれば同様なことが実現できることは明らかである。

【 0 0 4 1 】

また、別の変形例として、上記実施例の形態では集光投影光学系の非視差方向の投影倍率は 1 倍にしたが、他の倍率に出来ることも明らかである。この場合、上記実施例の中で説明した各種パラメータの数値は変化するが、同様な計算で容易に数値を求めることが出来る。

【 0 0 4 2 】

また、上記図 8 及び図 9 に示した集光投影光学系 4 1 と、図 1 1 に示した集光投影光学系 4 1' では、第 1 のレンズ 7 1 と第 2 のレンズ 7 3 との間にスリット 7 2 を設けたが、これを用いずに重ね合わせ投影光学系 3 9 のレンティキュラーレンズ 6 5 の後、レンズ 6 6 との間に複数のスリットを設けても良い。あるいは 5 分割された液晶 3 8 とレンティキュラーレンズ 6 5 との間に光線と平行となるように仕切をつけてもよい。これらの場合、上記集光投影光学系 4 1' において上記補正用シリンドリカルレンズ 8 0 は第 1 のレンズ 7 1 と第 2 のレンズ 7 3 との間に位置するものである。

【 0 0 4 3 】

【発明の効果】

本発明によれば、同時に複数の要素ホログラムを露光できるので、振動減衰待ちの回数を減らせる。したがって、トータルとしてホログラフィックステレオグラムを作成する時間を短縮できる。また、光学系としての光利用効率を向上させることが出来る。

【図面の簡単な説明】

【図 1】

本発明の実施の形態となる、ホログラフィックステレオグラム作成システムの構成図である。

【図 2】

上記ホログラフィックステレオグラム作成システムを構成するホログラフィックステレオグラム露光装置の構成図である。

【図 3】

上記ホログラフィックステレオグラム露光装置内部の参照光学系の詳細を示す図である。

【図 4】

上記ホログラフィックステレオグラム露光装置内部の物体光光学系を構成する照明光学系の詳細を示す図である。

【図 5】

上記物体光光学系を構成する重ね合わせ投影光学系の視差方向の詳細を示す図

である。

【図 6】

上記重ね合わせ投影光学系の部分的な光路を説明するための図である。

【図 7】

上記物体光光学系を構成する重ね合わせ投影光学系の非視差方向の詳細を示す図である。

【図 8】

上記物体光光学系を構成する集光投影光学系の詳細を示す図である。

【図 9】

上記重ね合わせ投影光学系と集光投影光学系の視差方向の組み合わせを示す図である。

【図 1 0】

上記重ね合わせ投影光学系と集光投影光学系の非視差方向の組み合わせを示す図である。

【図 1 1】

集光投影光学系その他の例を示す図である。

【図 1 2】

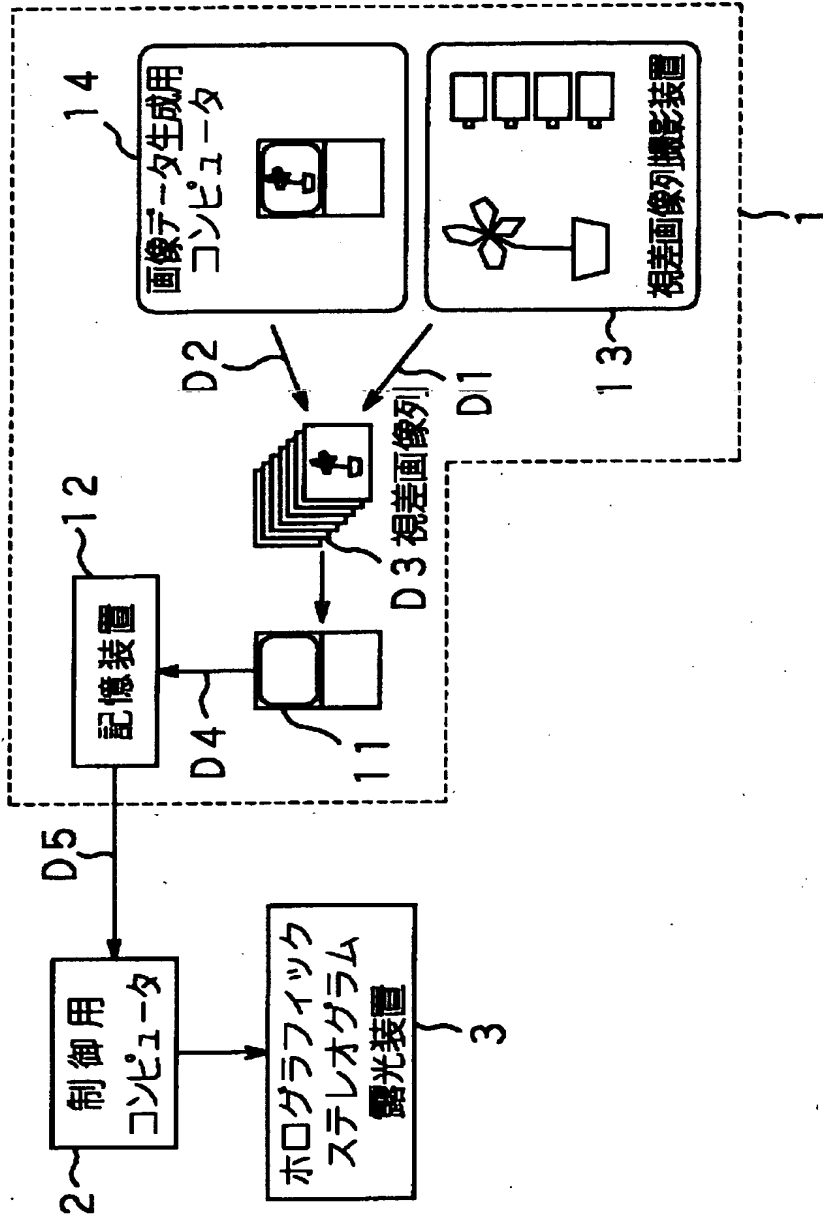
ホログラフィックステレオグラムの作成方法を示す図である。

【符号の説明】

1 データ処理部、2 制御用コンピュータ、3 ホログラフィックステレオグラム露光装置、3 1 レーザ光源、3 5 物体光光学系、3 6 照明光学系、3 8 液晶、3 9 重ね合わせ投影光学系、4 0 液晶の像、4 1 集光投影光学系、4 2 ホログラム用記録媒体、4 4 参照光光学系

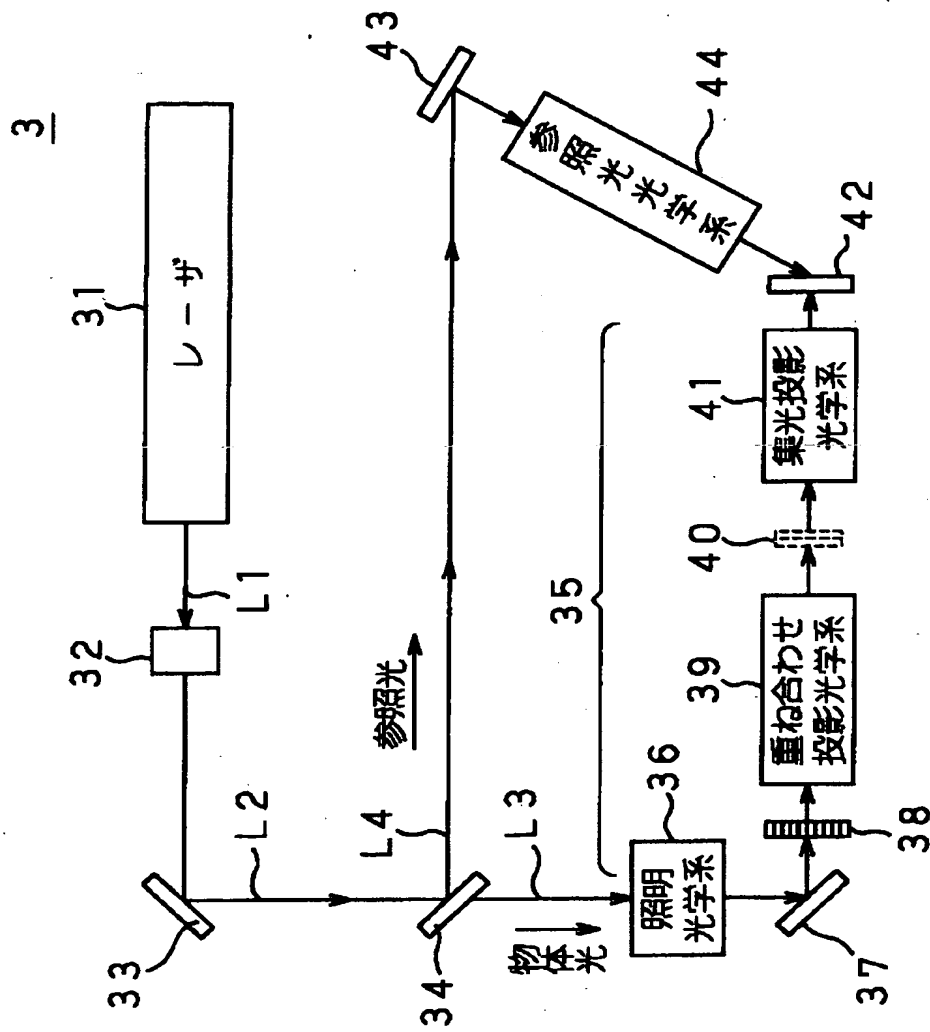
【書類名】 図面

【図 1】



ホログラフィックステレオグラム作成システム

【図2】



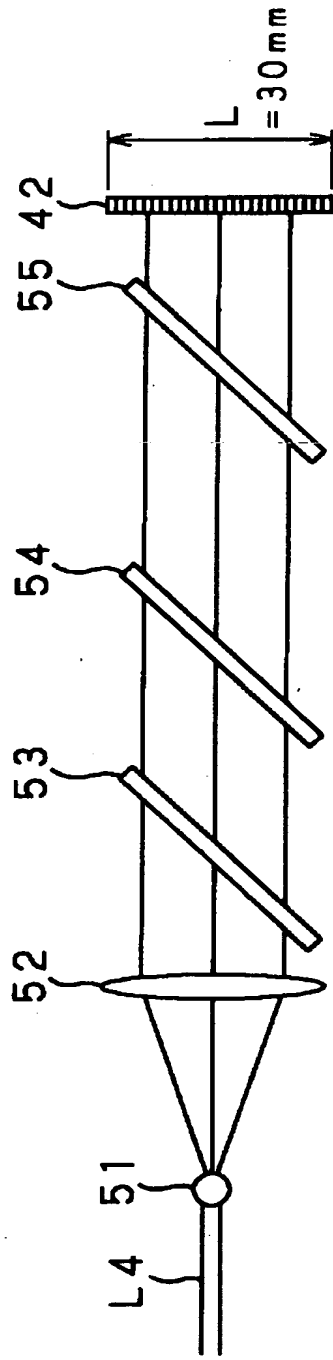
3: ホログラフィックステレオグラム露光装置

35: 物体光学系

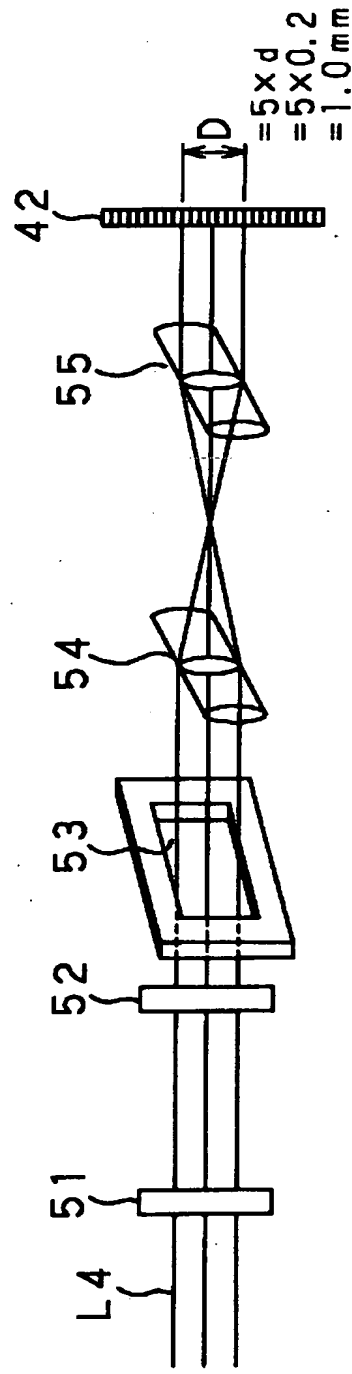
【図 3】

44 参照光学系

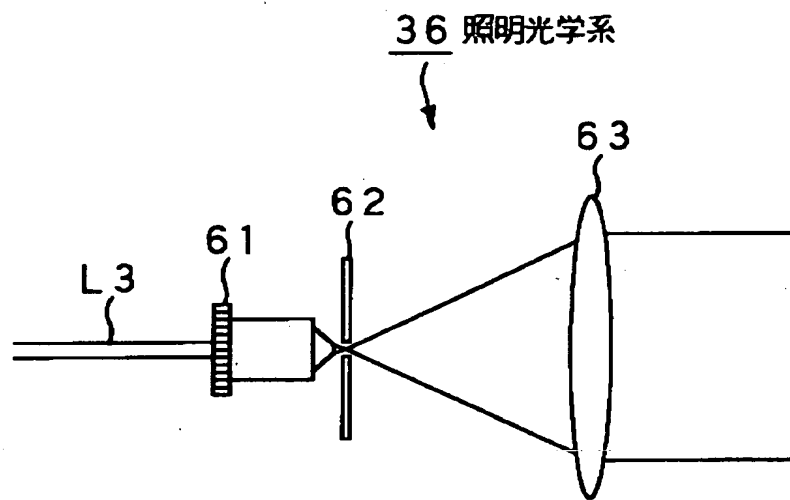
(A)



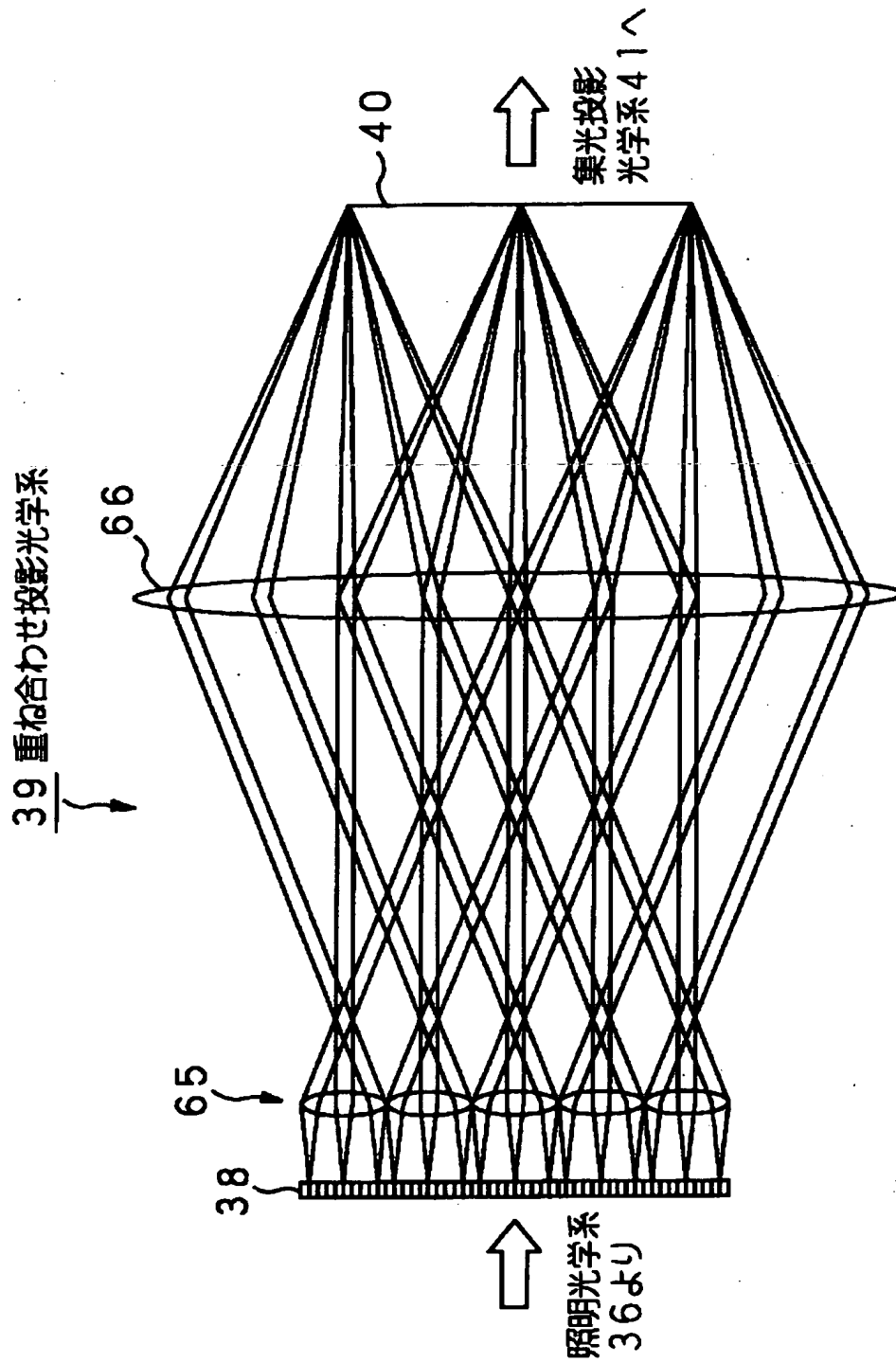
(B)



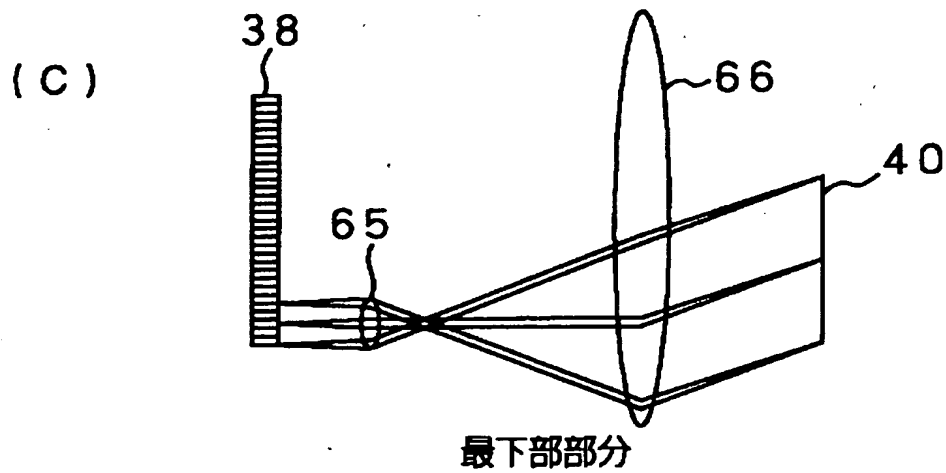
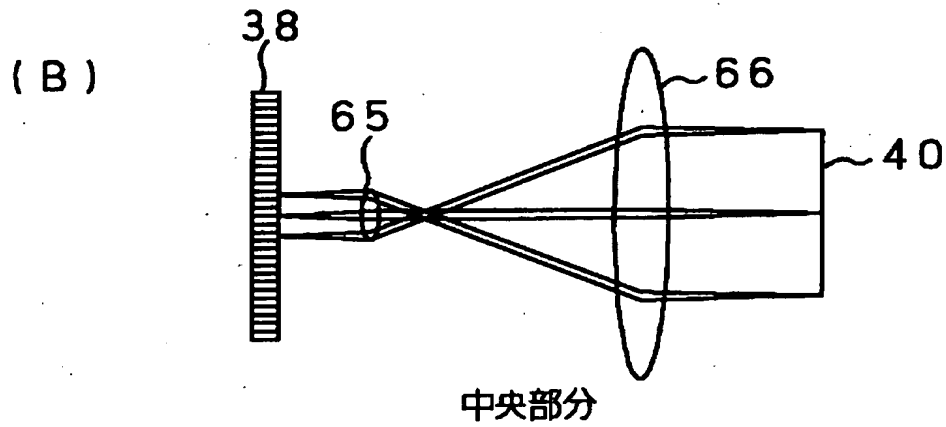
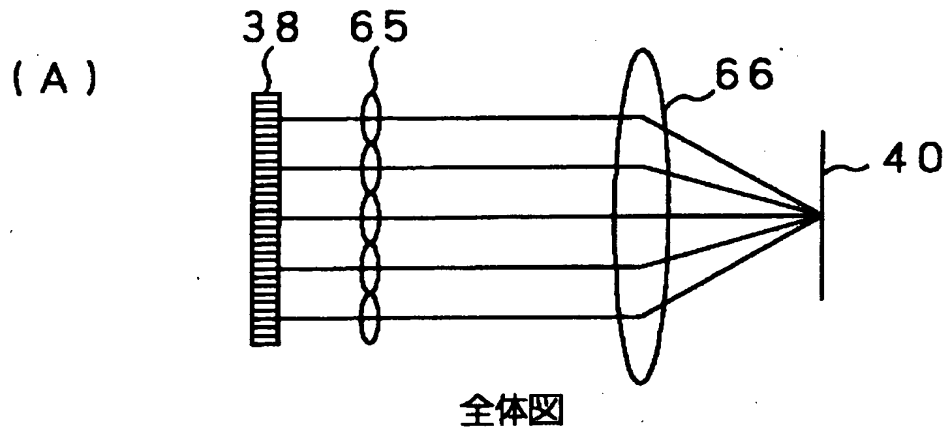
【図 4】



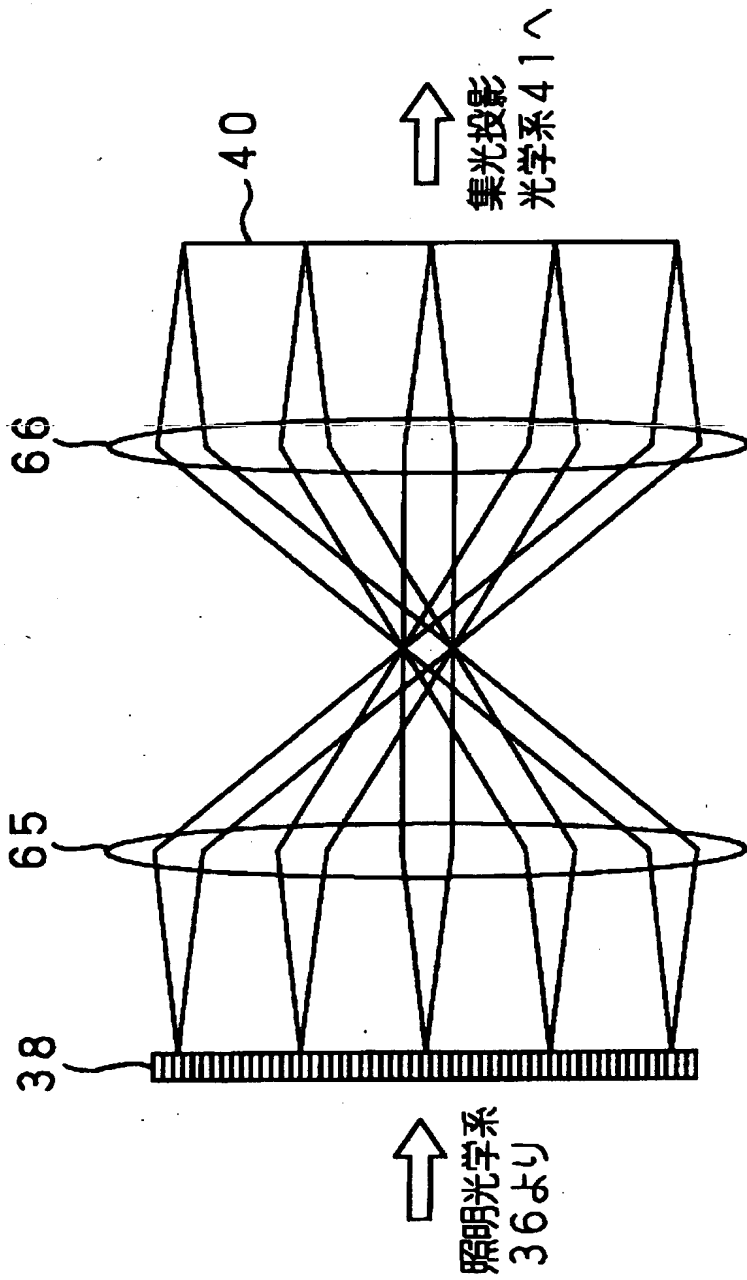
【図 5】



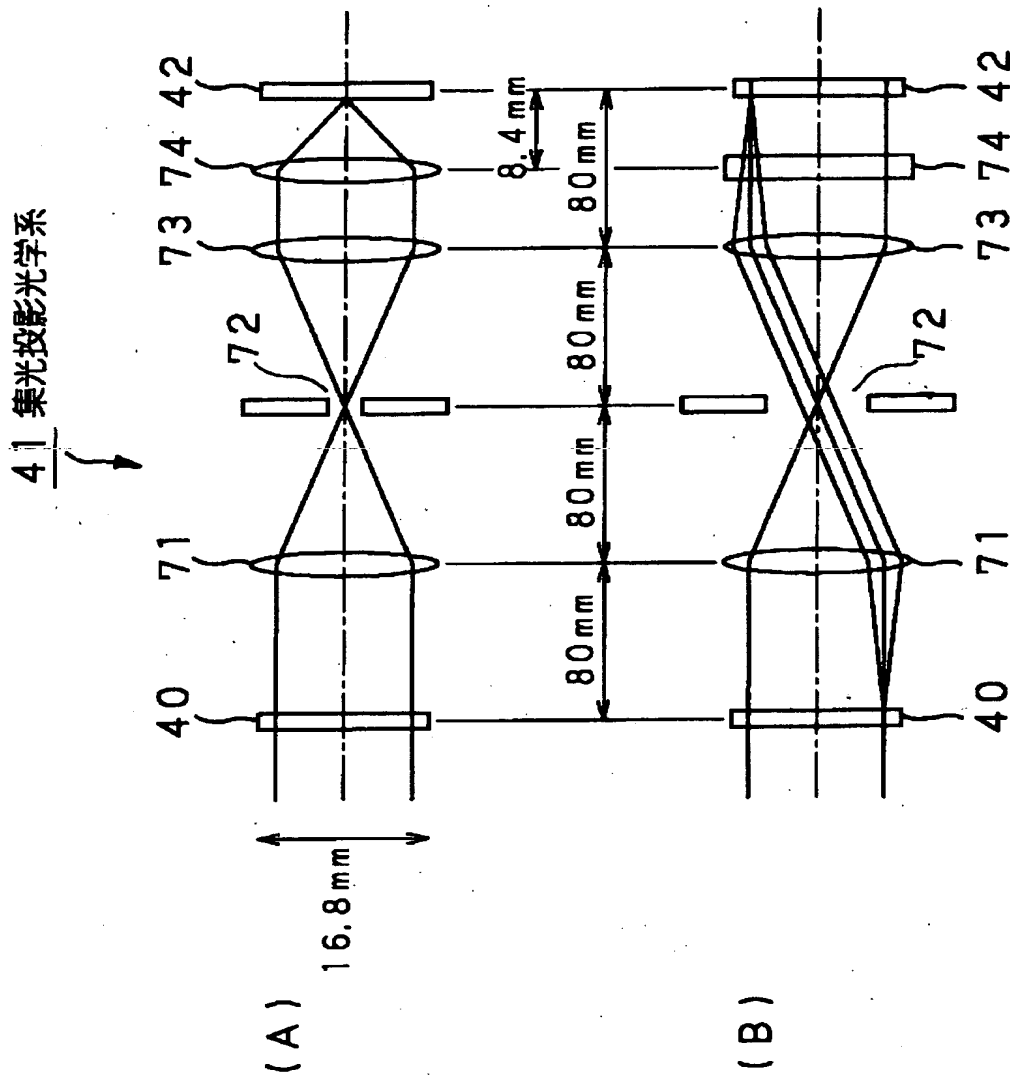
【図6】



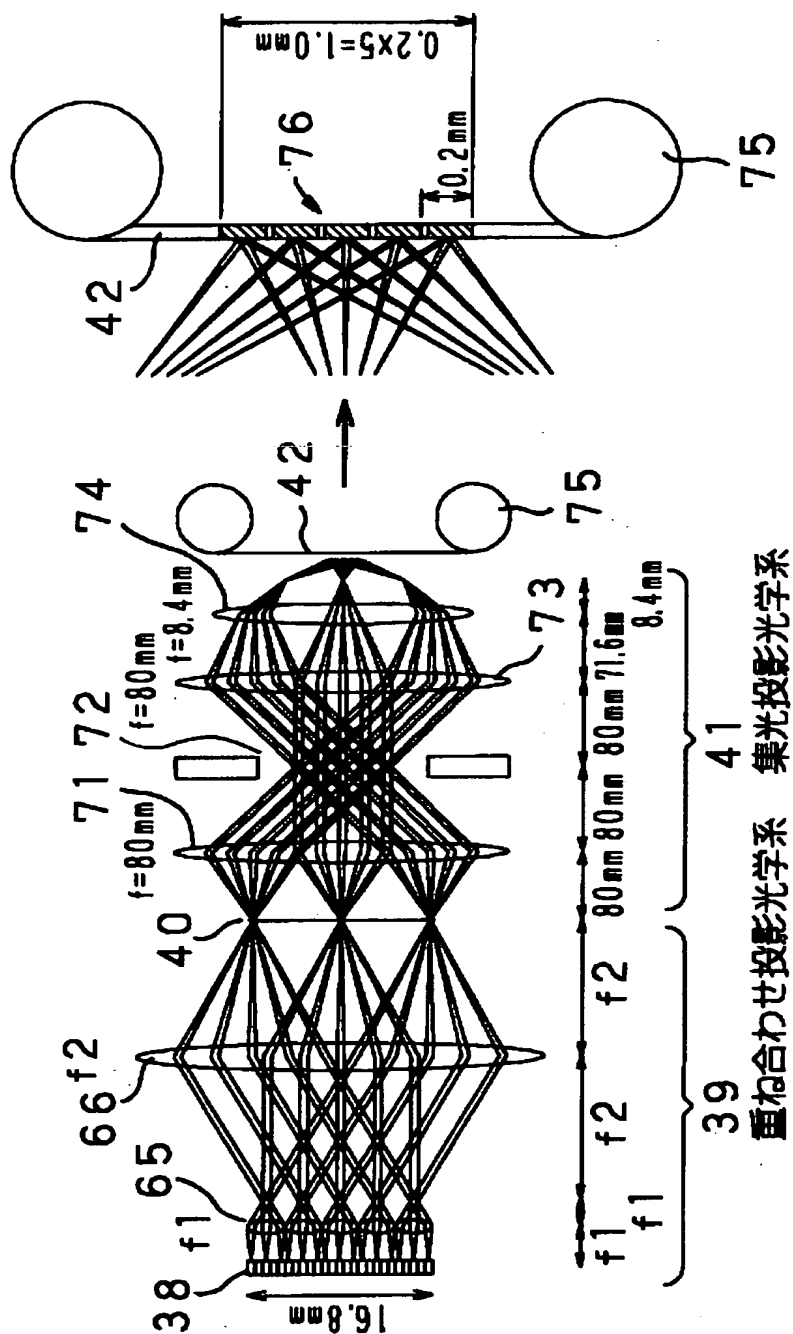
【図7】



【図8】

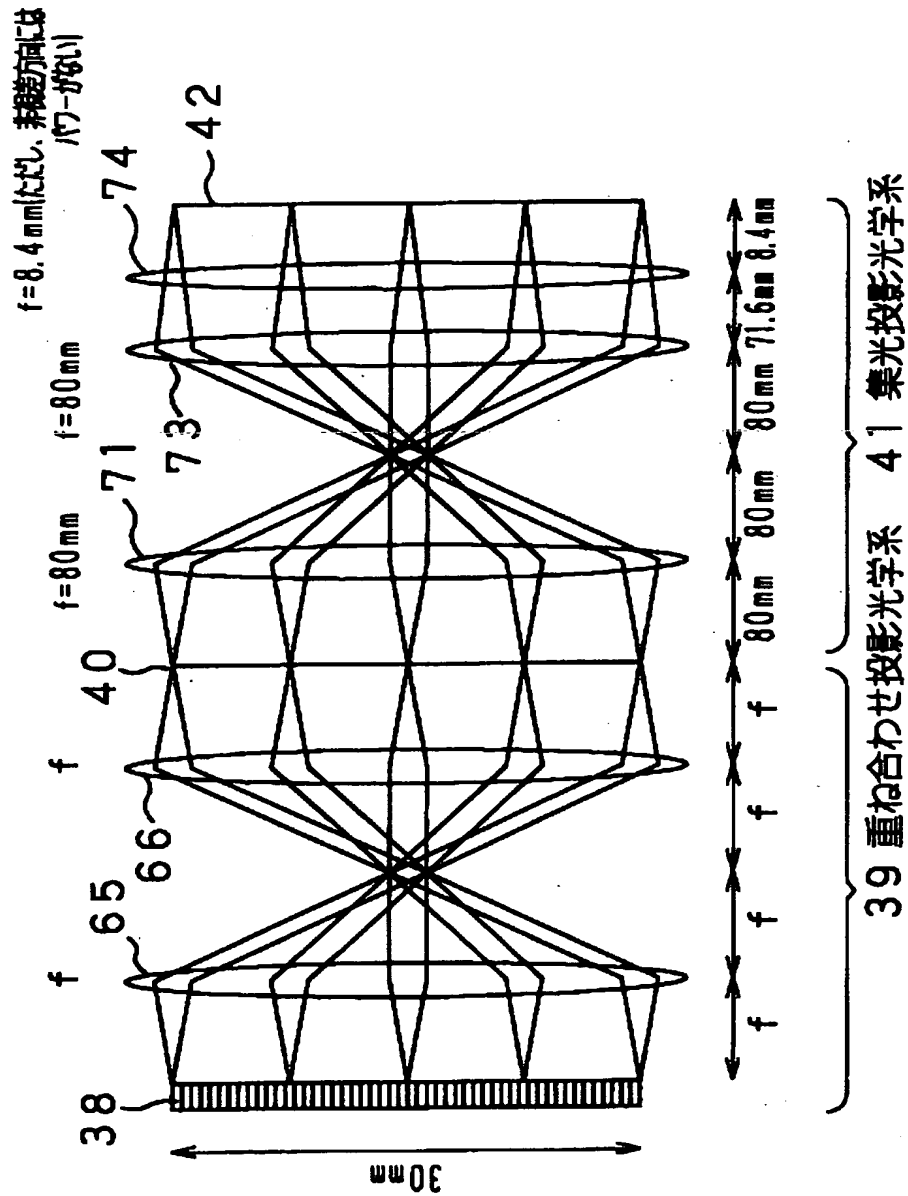


【图 9】

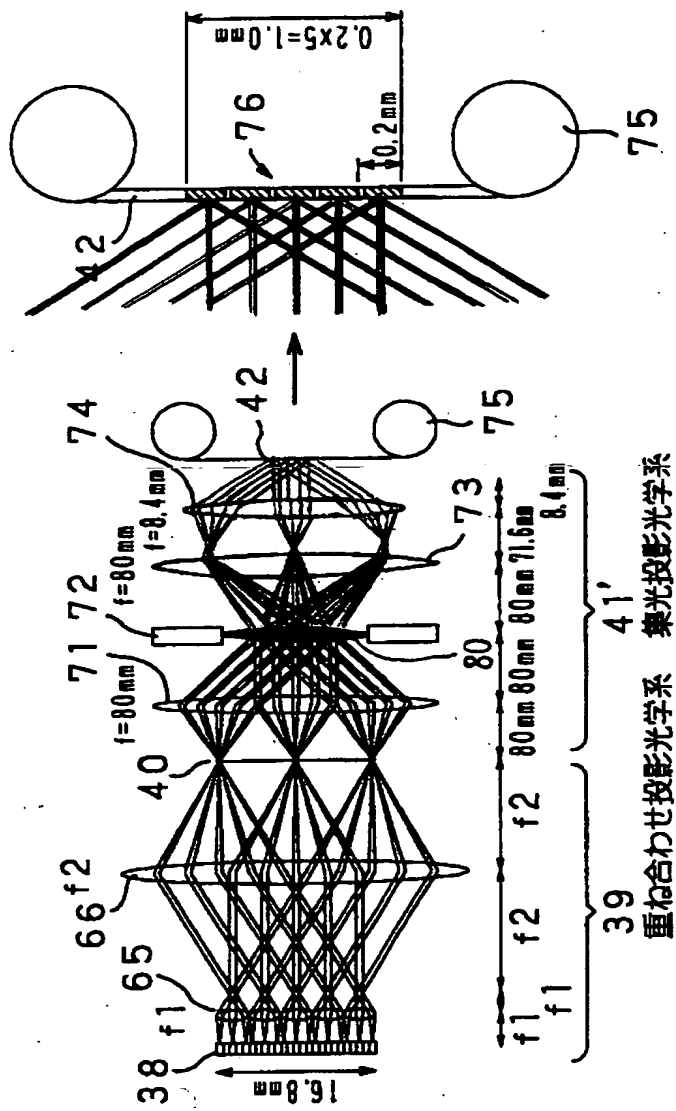


76:要素プログラム

【図 10】

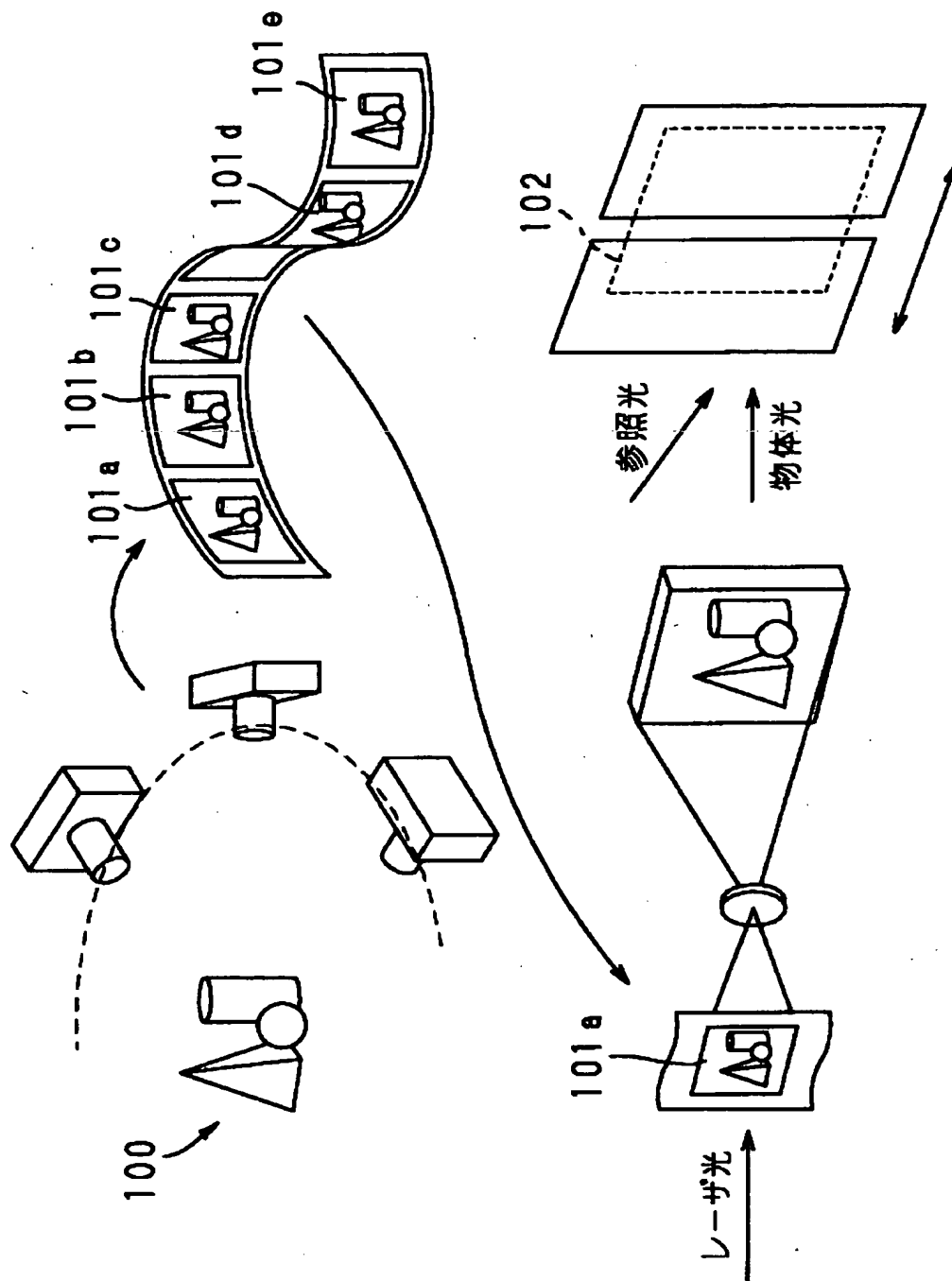


【図 11】



76: 要素ホログラム

【図 12】



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 ホログラム作成時間を短縮することのできるホログラフィックステレオグラム露光装置及び方法を提供する。

【解決手段】 照明光学系 3 6 は、ビームスプリッター 3 4 により分岐された物体光 L 3 を均一に広げる。空間光変調部（液晶） 3 8 は、制御用コンピュータから送られてきた、視差方向に複数の画像、例えば 5 枚の画像を、制御用コンピュータの制御に応じて 5 分割表示する。重ね合わせ光学投影系 3 9 は、空間光変調部 3 8 を透過した光を重ね合わせて投影する。集光投影光学系 4 1 は、重ね合わせ光学投影系 3 9 からの投影画像をホログラム用記録媒体 4 2 面上に、視差方向に関しては集光し、非視差方向に関しては結像させる。

【選択図】 図 2

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号 [000002185]

1. 変更年月日	1990年 8月30日
[変更理由]	新規登録
住 所	東京都品川区北品川6丁目7番35号
氏 名	ソニー株式会社